

# 2-1-4

Playful Pedagogy とは

## 「遊び」と「教育」の板挟み

～幼児のGuided play (誘導的遊び) への理解～

朱 家雄

Zhu Jiaxiong …………… 華東師範大学名誉教授



中国教育学会常任理事、学術委員、環太平洋地区学前教育研究会 (PECERA) 中国大陸委員会主席。『Early Years』など6つ余りの国際学術雑誌の編集委員を務める。学術研究と教育の主な分野は、就学前教育の基本理論、幼稚園カリキュラム等。これまでに主宰した各種のテーマ研究は多項目にわたり、発表した著作・翻訳・教材は数十種類、論文は100以上に上る。省・部レベル以上の賞を多数受賞しており、国務院の特別助成を受けている。

朱家雄学前教育研究：<http://www.zhujx.com/>

### ● 遊びを通して学ぶ力を 子どもはもともと備えている

幼児教育において、保育者は子どもの遊びにかかわるべきか否か。これについての議論は以前から世界中で繰り返行われてきたし、今後も続くだろう。簡単には答えを見いだせない難しい問題であり、非常に重要な論点であるからである。今回、改めて考察したい。

最初に確認しておきたいのは、たとえ大人がかかわらなくても、子どもは遊びを通して学んでいくということである。

アメリカの幼児教育研究者Rhoda Kelloggは、世界各国の2歳頃から6歳頃までの子どもが描いた150万枚以上の絵を観察し、大

半の子どもは保育者から指導されなくても、自然に絵を描く力を発達させていくことを明らかにした。図①に見られるように、どの子どもも年齢が上がるにつれて、なぐり描き、点と線とを交えた図形、人の顔の正面、人の全身の正面というように、表現力を段階的に高めていく。さらに、4～5歳



図①

頃になると動物を横から描けるようになる。

— 図②参照

粘土細工や積み木でも、子どもが保育者の手を借りることなく、心身が発達するのに従って次第に複雑な形を作るようになることをさまざまな研究者が報告している。

— 写真①②

## ● 保育者がかかわった方が 子どもの成長は促される

前節で見たように、子どもは遊びを通して自然に力を身につけていく。では、保育者は、子どもの成長にどのようにかかわるべきだろうか。自由に遊ぶ子どもをただ見守ればよいのだろうか。あるいは、何らかの形で遊ぶ子どもに手を差し伸べるべきなのだろうか。

1980年代の欧米では、子どもが自然に成長することを尊び、保育者や教師はなるべく子どもにかかわらないようにしようという意見が研究者の間で強まった。しかし、現在では、保育者や教師が子どもにかかわることが多くの国で重視されつつあるし、私も重視すべきであると考えている。自然な発達にただ任せるだけでは子どもの力の伸びには限界があること、換言すれば、保育者や教師がかかわった方が子どもの力が伸びることがわかってきたからである。

図③には、3歳6か月の子ども数人が描いた絵を掲げている。左は保育者から何も



写真①

自由な状態での  
子どもの発達レベル



写真②

教えられなかった子どもが自由に描いた絵、右は保育者の指導を受けた子どもが描いた絵である。右側の絵、保育者による指導のもとに描いた子どもの絵の方が、複雑な表現がなされている絵、言い換えれば、客観的に上手な絵とすることができるだろう。

どの年齢の子どもの絵を観察しても、保育者に教えられた子どもの方が、教えられなかった子どもよりも複雑な、いわゆる上手な絵を描いている。つまり、子どもの個人差によってではなく、大人からの指導の有無によって表現する力に違いが生じているということである。

これは、粘土細工にも積み木にも当てはまる。— 図④参照 すなわち、子どもが1人で取り組むよりも、保育者の指導のもとに取り組んだ方が、いっそう複雑な、巧みな表現ができるのである。

ただ、子どもが自分の力だけで描いた絵、作った粘土細工や積み木の方が良いという意見も、幼児研究者の間には根強く存在する。それこそが子どもの真の自己表現であり、保育者の手など借りずに、自然に自分



図②

図③

図④

の力を伸ばしていくことに大きな価値を見いだしているのである。

このように、子どもが独力で作った作品と保育者の指導を受けて作った作品の、どちらが好きか、どちらが子どもの作るべき作品かは、論者の抱く幼児教育観によって大きく異なる。もっとも、保育者の指導のもとに完成した作品の方が高度な表現がなされるということは、どの幼児研究者にも共通する見解である。そのことを示すエピソードを紹介しよう。

中国では、伝統的に保育者が子どもの遊びにかかわっている。子どもが自由に遊ぶことを重視する伝統を持つ、アメリカやイギリスなどの幼児研究者でも、中国の子どもが保育者の指導のもとに描いた絵、作った粘土細工や積み木を見ると、誰もが目を見張る。そして、「まるで芸術品のようだ」と口を揃える。つまり、異なる教育観を抱く論者からも賞賛され得る、客観的な特徴を備えているということである。保育者による指導の成果が大きいことがわかるだろう。

子どもはもともと大きな力を持っている。それをさらに伸ばすためには保育者の力が必要だと、私は考える。すなわち、保育者は子どもの遊びをただ見守るだけではなく、遊びに手を差し伸べるべきなのである。

では、保育者はどのように手を差し伸べたらよいのだろうか。次節ではこれを検討したい。

## ● 保育者が子どもの遊びにかかわる際 重視すべきポイントとは

保育者が子どもの遊びにかかわるにあたって心がけるべきことは、まず、子どもの意思を尊重することである。

アメリカの幼児教育研究者Rhoda Kellogg

による子どもの描画の研究などを挙げて前述したように、子どもは保育者がかかわらなくても、遊びを通して自然に多くのことを学ぶことができる。これは、自由に遊ぶことが楽しいからであると考えられる。楽しめる環境があつてこそ、子どもは学び得ると言っても良いだろう。したがって、子どもの意思を考慮せず、保育者の考えを押しつけるような指導をしても子どもは何も学ばないと考えられる。

指導する目的を持つことも、大切である。子どもにとって最も身近な社会人の一人である保育者には、知識と社会性を子どもにしっかり伝える責任もある。したがって、子どもの遊びにただかかわるのではなく、その遊びを通して、子どものどのような力を伸ばしたいのかをしっかりと考えるべきである。

子どもによって、興味を抱く対象などは異なるため、保育者には、子ども一人ひとりの個性に応じて、何の遊びによってどのような力を伸ばすのかなどをしっかりと計画していったほしい。6歳頃からは就学への準備として、ある子どもには読み書き、別の子どもには計算というように、子ども一人ひとりの適性に合った教科学習を見つけ、それに取り組むよう促すことも重要になるだろう。

このように保育者には、あくまでも子どもの主体性を尊びながら、自分の立てた目的に沿って子どもを導く遊び、つまりGuided playを行うことが求められるのである。

また、現代は通信技術の開発が進み、自分の部屋にいながらにして世界中の情報が手に入る。そのため、現在の子どもの頃、あるいは保育者の子どもの頃よりもずっと多くの情報に触れている。時代の違いを考慮し、Guided playにも新しい要素を取り入れるべきであると、私は考える。例えば、保育者の指導のもと、子どもがiPadを使って

行う遊びなどである。今も今後の社会でも求められる、情報通信機器を使う能力を鍛えることにもつながるだろう。

## ●子どもはGuided playを通して大きな達成感と自信を得られる

保育者によるGuided playによって、子どもの表現力が伸びるだけでなく、挑戦しようという子どもの意欲も高まると考えられる。これについて、積み木を例に考察してみよう。図⑥を見てほしい。右上の写真は子どもが保育者の教えを受けずに作ったヘリコプター、左の写真は同じ子どもが保育者の指導を受けて作ったヘリコプターである。

右のヘリコプターは単純な構造だが、完成させたとき、子どもは達成感を得ただろう。そして、「もっと大きく、実物に似せたヘリコプターを作りたい」という気持ちも抱いたはずである。もっとも、それを実践しようとしても、子どもだけの力では、構造がずっと複雑な左のヘリコプターを作るのは難しい。挑戦してもうまくいかないだろうから、そのまま保育者が何もしなければ、子どもが自信を失うことにもなりかねない。

しかし、保育者がアドバイスをしたり、一緒に積み木に取り組んだりすれば、子どもは左のようなヘリコプターを作ることができる。子どもは背伸びをして頑張っている



図⑥

るだけに、作っている過程で味わう興奮、完成時の達成感は、右上のヘリコプターを作ったときよりも何倍も大きいだろう。

これを繰り返していけば、子どもは表現力を伸ばすのはもちろん、努力したり工夫したりする楽しさを味わいながら、「やればできる」という自信をつけられるに違いない。何事にも立ち向かおうとする気持ちにもつながるはずである。

## ●Guided playによってこそ子どもの力は最大限に伸びる

どの子どもも、大人が想像するよりも多くのことを自然に学んでいる。Guided playは、子どもが生まれながらに持っている大きな力をもっと発揮できるようにするための手助けであると言えるだろう。

ただ、保育者が子どもの遊びにどの程度かかわるかは難しい問題である。かかわる割合は、少なすぎると子どもの力の伸びが少なくなるし、多すぎても子どもの自主性を損ね、やはり子どもの力は伸びにくい。また、前にも述べたように、人間には一人ひとりの個性がある。保育者が強くかかわった方がよい子どもも、保育者があまりかかわらない方が力を伸ばせる子どももいるだろう。したがって、保育者には、子どもの自主性を尊重しながら、自分が適切に子どもにかかわれるように、何を、いつ、どのように教えるかを、目の前の子どもに応じて考えることが求められる。

このように、子どもの自主性と保育者の指導のバランスについて、どの子どもにも共通する指標を見いだすのは困難である。幼児教育の永遠の課題と言っても過言ではないだろう。子どもに対する保育者のかかわり方についての議論は、簡単に答えを出せないと、私が冒頭に述べた所以である。